四季録

司馬遼太郎と吉村昭Ⅱ

司馬さんは時折ジッと視線を外さずこちらを見る。真白の前髪が触れる黒縁眼鏡の奥にある目は独特であった。穏やかを装いながらも眼光鋭く常に何かを探る視線。それは直接からだごとぶつけ吸収する絵かきと違い、おそらくは間に言葉が介在し、目と頭が常に連動しているように見えた。

1993年に出した僕の最初の画集を送った。するとブルーのインクで書かれた、ゆっくりとした丁寧な筆致の礼状をいただいた。その内容。「…宇和島で、こういう形象を追い求めていらっしゃることに驚き、敬意を覚えました。造形家の過ごし方として、宇和島に居つづけていらっしゃることは、すばらしいことだと思います…」とあり、全く恐縮した。しかし、地方にいるという感覚の薄い僕は少し困った。

司馬さんは昔、産経新聞に勤め、美術評論も書いていたのだ。そこで思った。司馬さんは地方ということに特別な思いがあるのではないか。国民的作家などと言われても動かず、大阪という地方に居続けたのだ。

翌日は宇和島を一番よく眺望できる愛宕山に登った。館長さんの説明を受けながら司馬さんが言った。「宇和島は人が生きるに理想的な大きさと地形ですね」と。

続いて吉村さんを書く。宇和島を舞台にした小説やエッセーがあまたあるが、僕は読者ではなく、ちょっとしたエピソードなどを。

驚くのは宇和島訪問が50回を超えていることだ。これはもう恋をしていると言っていいくらい。僕が最初に接触したのは、やはり渡辺館長さんに誘われて行った、吉田町のうなぎ屋「横堀食堂」での取材の折り。出版関係のお供数名を引き連れ店内に入る。このうなぎ屋は、店の前を流れる川で捕ったものを出している。長年使い続けてきたさまざまな道具を見せてもらいながら、テープレコーダーを回し話を聞き取材は続いた。

この時の取材から、小説「闇にひらめく」が生まれる。1978年、小説新潮に初出されたものをいただいたが（後に「海馬（とど）」に収録）、何と食堂の主人は前科者になっていた。いやはや小説家というものは。

これを原作に今村昌平監督が撮った映画「うなぎ」が1997年、カンヌ国際映画祭においてパルム・ドールを受賞した。しかし、宇和島の人に話題を向けても元になったことは知らない。

宇和島出身の小説家、片山恭一さんともお付き合いがあるが、この地が絡む「世界の中心で、愛をさけぶ」が空前のベストセラーになり映画化されても、しばらく話題に上ったくらいで終わり。盛り上げたり町おこしにはしないのである。良くも悪くも、宇和島人の気質と言えばいいのか。

（吉田　淳治・画家）

愛媛新聞 :朝刊 2019/12/22 面名:文化 ページ:019
(C) 愛媛新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。